

2013年3月29日・朝日新聞では

鎮魂の詩新たに60編

大槌町出身・東梅洋子さん 震災詩集『うねり』を出版

文：但木汎

北上市に住む大槌町出身の詩人東梅洋子さん（61）が、新たな詩集『うねり』を出版した。震災直後に手作りで出した詩集に新たに60編を付け加えた。舞台は大槌町。犠牲になった人たちを悼み、その魂と会話するような作品は、鎮魂への思いと哀切さに満ちている。

「連結詩 うねり～大槌町にて」と題した詩集には、この2年間で詠んだ70編が3章に分けて収められている。

冒頭の「3月11日の午後」は、震災1カ月前の同窓会で再会し、津波で亡くなった級友に呼びかけた。

「同級生の彼女／何十年ぶりかの再会／1ヶ月後／生まれ育った／海辺の町に現れた／巨大な影と／たわむれて／帰る道を／忘れたと／どこで道草してる／桜のつぼみが／咲く頃 もどるのね／帰るのよ」

最後の「須賀町にて」は、今も犠牲者の声が心に届く様子を描いた。

「晴れた暑い日／強い風に乗り／砂を巻き上げ／叫びの音が／聞こえた／皆には届かない／確かに／激しい唇で／唄った／木々の葉がゆれ／乱れ／悲しく／空間の中で今／恨むでなく／響いた／私に」

東梅さんは震災後の2011年4月、19編の小冊子の詩集を600部作り、被災者を励ました。女性詩人の作品に曲を付けて歌っている吉岡しげ美さんがこの詩を知り、11年秋の東京・築地でのコンサートで、俳優吉行和子さんが朗読した。

東梅さんは、その後も、大槌町にボランティアで支援に入り、詩作を続け、今回、コールサック社（東京都板橋区）から出版。吉行和子さんが帯文を寄せた。

コールサック社代表で詩人の鈴木比佐雄さん（58）は解説でこう記した。

「多くの読者を朗読に促す力は、きっとこの東梅さんの帰らぬ人が甦^{よみがえ}ってくる精神の『うねり』のリズムが、津波のうねりを越えて、津波にさらわれた帰らぬ人びとの声^{すく}を掬い上げてくれる可能性を秘めているからだと思われ」

と紹介されています。